

「21世紀の古典」の条件とは何か

佐藤 優

(作家)

現在、世界には膨大な数の書物が存在しているが、果たしてこのうちの何冊が古典となっていくだろうか。作家の佐藤優が「21世紀の古典の条件」と、決して古びることがない真に深い教養と鋭い先見性に裏打ちされた書籍を論じる。

古典といつてまず思い浮かぶのは、孔子の『論語』やシェイクスピアの戯曲のような、数百年にもわたって読み継がれている作品ではないでしょうか。確かに数百年とまではいわなくても、五〇年以上は読まれていなければ、古典とは呼びにくいかもしれません。しかし、現代はかつてないほどに「書籍の消費される速度」が上がっています。新刊書の多くが、一カ月もすると書店から姿を消してしまふ。そうした状況を踏まえると、現代では「一〇年間読み継がれた本」であれば、古典になりうる資格は十分あるといえます。

ただし、息の長さだけが古典の条件ではありません。その本が持つ思想の先見性もまた、優れた古典の条件となります。たとえば、ポール・A・サミュエルソンの『経済学』は、今でこそあまり読まれなくなっていますが、内容面からいえば「現代的な古典」といっていいでしょう。『経済学』は二二世紀の本ではないので、ここでは説明を省略しますが、現代の資本主義社会の構造を考えるうえでは外せない作品です。

したがって「二二世紀の古典」と呼べるような書籍は、「今後一〇年は読み継がれること」と「時代を先取りしていること」の二点が必須条件となります。こうした観点を踏まえて、私が選

んだ本は何か。それはミシェル・ウエルベックの『服従』（二〇一五）とユヴァル・ノア・ハラリの『ホモ・デウス——テクノロジーとサピエンスの未来』（二〇一五）の二作品です。

ウエルベック『服従』について

ウエルベックの『服従』は、二〇二二年のフランス大統領選挙によってイスラーム政権が成立するという設定の近未来小説です。フランスの大統領選挙では、いわゆる「二回投票制」が採用されています。第一回投票で有効投票数の過半数を獲得する候補者が現れなければ、上位二候補による決選投票が行われ、そこで有効投票の過半数の支持を得た候補が大統領になる仕組みです。

小説では、第一回投票で移民排斥を訴える国民戦線代表のマリーヌ・ル・ペンが一位、イスラーム同胞党を率いるモアメド・ベン・アッベスが二位になりました。つまりフランスの有権者は、「ファシストか、イスラーム主義者か」という究極の選択を迫られるわけです。作中、左派の社会党と保守・中道派のUMP (Union Pour un Mouvement Populaire 国民運動連合) は、「ファシストよりはイスラーム主義者のほうがまし」

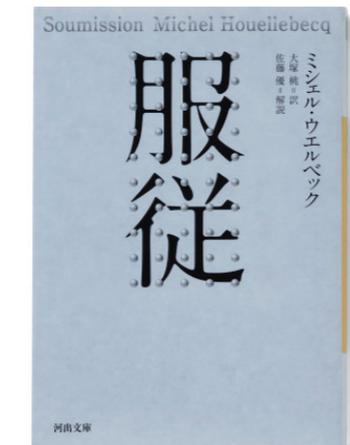
二つの選択肢が示唆するもの

『服従』の中でフランスの有権者は、「ファシズムか、イスラーム主義か」という二者択一を迫られました。これは、まさに現在のフランスが「近代的（モダン）な価値観である保守主義と社会民主主義のいずれもが、グローバル経済に対して機能不全に陥っている」ことを示唆

するような内容です。グローバル経済が拡大するにつれて、先進国では格差が広がり、労働者の賃金も低下していきました。規制緩和や労働市場の流動化が進むことで雇用が不安定

になり、それが社会不安へとつながっていくのは、ある意味当然です。それに加えて、現代では家族や共同体による相互扶助機能も弱体化しています。

ただし、我々がこのようなグローバルリズムを迎えたのは、はじめてのことではありません。一九世紀後半もまた、グローバルリズムの時代で



『服従』ミシェル・ウエルベック (大塚桃訳、河出文庫)

した。一九世紀前半から第一次世界大戦までの一〇〇年の間にアメリカ大陸へ渡ったヨーロッパ人は、およそ六〇〇〇万人にのぼるといわれています。その時代、国境を越えたヒト・モノ・カネの移動が活発化しました。ところが、一九一七年のロシア革命から第二次世界大戦にかけて、自由民主主義は瀕死の状態に陥ります。その要因の一つが、一九二九年に起こった世界恐慌です。世界恐慌により壊滅的な打撃を受けた多くの国々は、ファシズムと共産主義のいずれかに舵を切っていました。イギリスの歴史学者エリック・ホブズボームの『20世紀の歴史——極端な時代』によれば、一九二〇年には選挙によって選ばれた議会と政府を持つ国が三五カ国以上も存在していたのに、一九四四年には地球上の六四カ国中、一・二カ国にまで減ってしまったとい

います。なぜ資本主義の危機に対して、多くの国々はファシズムと共産主義を解決策として選択したのか。それは資本主義が行き詰まり、経済的に苦しむ国民が増えていったので、それを乗り越えるための手段としてファシズムと共産主義が圧倒的に支持されたからです。ファシズムは、自由主義的な資本主義によっ

と考えると、決選投票ではベン・アッベスを支持するようにと支援者へ訴えました。結果、ベン・アッベスは勝利し、フランスにイスラーム政権が誕生したというのが物語の主な内容です。『服従』の主人公であるフランソワは、ソルボンヌパリ第三大学で文学を教える大学教授という設定で、完全なノンポリではないものの、政治とは一定の距離を置くインテリとして描かれています。

しかし、イスラーム政権の樹立により、大学ではムスリム（イスラーム教徒）しか教壇に立つことができなくなりまして。フランソワも大学教授の職を失ったのですが、十分な年金が支給されるので（サウジアラビアをはじめとする中東産油国の資金提供により、フランスのイスラーム政権は経済力がある）、生活に支障はありませんでした。しかし、最終的にフランソワはムスリムに改宗し、大学教授に復帰する道を選びます。